

## 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）

### 朝鮮民主主義人民共和国有色金属法が採択

2006年9月15日、17日、19日付の政府機関紙『民主朝鮮』は最近採択された「朝鮮民主主義人民共和国有色金属法」に関する法規解説を掲載した。採択日時は明らかではないが、この解説によれば、5章46条で構成されるこの法律は、鉄以外のすべての金属に適用される法律として、有色金属の生産、供給、利用、回収ならびに国家による買い上げおよび全群众的な管理原則を規定している。管理の対象は、鉱石、精鉱、製品と加工切断品、切削くず、残渣、および死蔵されているか使用できない状態の「有色金属くず」を含む。

管理原則においては、生産における精錬実収率の向上や精鉱の品位向上を規定している。回収や買い上げにおいては、銅や鉛、亜鉛、アルミニウム等の塊や電線等の完成品の取引禁止などが規定されている。

経済効率を向上させるとともに、窃盗や横流しにつながる取引を禁止するなど、今回の立法は北朝鮮社会の現状を反映し、望ましい社会像を提示した内容であるといえる。

### 朝鮮民主主義人民共和国鑄造品協同生産法が採択

2006年9月27日付の政府機関紙『民主朝鮮』は最近採択された「朝鮮民主主義人民共和国鑄造品協同生産法」に関する法規解説を掲載した。採択日時は明らかではないが、この解説によれば、27条で構成される法律は、主として国营企業間での鑄造品生産における分業に関する基本的な原則を規定するものである。

国营企業間での生産連携の必要性が強調されるということは、電力事情の好転などで生産が回復してきているか、近い将来生産が回復する見込みあり、そのための準備を行っているためであると考えられる。

### 地下核実験の実施

2006年10月9日発の『朝鮮中央通信』は、北朝鮮が地下核実験を成功裏に終えたことを報道した。全文は次の通り。

「全国の人民が社会主義強盛大国の建設で一大飛躍を創造している躍動する時期、わが国の科学研究部門では2006年10月9日、地下核実験を安全かつ成功裏に行った。

科学的打算と綿密な計算によって行われた今回の核実験は、放射能漏れのような危険が全くなかったことが確認された。

核実験は、100%われわれの知恵と技術によって行われたもので、強力な自衛的国防力を渴望してきたわが軍隊と

人民に大きな鼓舞と喜びを与えた歴史的な出来事である。

核実験は、朝鮮半島と周辺地域の平和と安定を守るうえで寄与するであろう。」

### 労働保護規定の制定

2006年10月12日付の『民主朝鮮』によると、内閣は最近既存の規定を廃止し、新たに労働保護活動規定を制定した。

新規定は、労働保護活動に関連する制度と秩序をいっそうしっかりとちたてていくことに目的があり、労働安全教育と労働安全施設、労働衛生条件の保障、労働保護物資の供給、休息、休暇の保障、女性勤労者の労働保護、労働安全規律と秩序、非常救護、救助、労働災害事件の審議、労働保護監督において提起される原則的問題が規定されていると報道されている。

### 日本の対北朝鮮経済制裁

北朝鮮の核実験に対して、国連安保理において経済制裁が議論されている中、日本は2006年10月13日に閣議決定で、「特定船舶の入港の禁止に関する特別措置法」を根拠として、10月14日より6ヶ月間、北朝鮮船舶の日本への入港が全面的に禁止した。同時に、北朝鮮が原産地または船積地域である貨物の日本への輸入と、外国相互間の貨物の移動であっても、その貨物の原産地が北朝鮮であるか船積地域が北朝鮮であるものの役務取引も自由に行うことができなくなった。

### 地下核実験の実施にともなう国連の制裁決議

2006年10月9日に行われた北朝鮮の地下核実験に対して、国連安保理は、10月15日、北朝鮮に対する経済制裁を盛り込んだ「決議1718」を全会一致で採択した（決議文の日本語訳は、[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/n\\_korea/ampo1718.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/n_korea/ampo1718.html)参照）。北朝鮮は即座にこれを拒否した。

### 北朝鮮の経済改革は現在も進行中か

核実験で国際的な緊張が高まる中でも、北朝鮮は多くの法律や行政法規を制定している。これは、北朝鮮国内での法制度整備事業が継続して行われていることを示している。一般的にこのような法制度の整備は、対外開放や規制緩和などを行う際に多く行われる傾向がある。核実験等で国際的緊張が高まっているこの時期にも法制度の整備が継続されていることは、北朝鮮における経済改革が一時的なものではなく、戦略的な事業として準備され、行われていることを示唆している。

（ERINA調査研究部研究主任 三村光弘）